

## 矢野龍溪三大代表作品の継承性について

周 艶君

### はじめに

矢野龍溪は明治時代から昭和初期にかけて、様々な分野で多彩な活動が行われた知識人である。現在では『経国美談』（1883）、『浮城物語』（1890）、『新社会』（1902）などの作品を遺したことで知られているが、当時では政治家として立憲改進黨の結成に参加し、社会主義者として明治期社会主義運動に参加し、演説家として立憲政治を宣伝し、『演説文章組立法』を発表した。官吏として内務権大書記官を勤め、外交官として李鴻章と「福建省不割讓」について交渉し、教育者として慶應義塾の大阪分校の校長を勤め、文体文字改革を提唱した。また、新聞人として郵便報知新聞社社長、大阪毎日新聞社副社長を務めた。日本近代史の一環である近代文学史、明治文明開化史、自由民権運動史、近代新聞発達史、近代文体発生史、初期社会主義運動史の項に業績を残した。矢野龍溪は柳田泉に文学者として「造詣博大に圧倒」<sup>1</sup>と評価され、幸徳秋水に社会主義者として「空谷足音」<sup>2</sup>と位置付けられ、丸山真男に「たこつぼ」型の多い日本近代の知識人の中にあって「特異の存在」<sup>3</sup>と強調された。

矢野龍溪の作品は随筆、小説、遊記、論説など様々なジャンルがあり、内容は政治、文学、思想、経済、外交、文化、教育など様々な分野に触れている。例えば、『人権新説駁論』、『経国美談』、『譯書讀法』、『日本文體文字新論』、『周遊雜記』、『浮城物語』、『新社会』、『出鱈目の記』、『不必要』、『安田善次郎伝』、『ハンニバル』などが挙げられる。その中に大きな反響を巻き起こしたのは『経国美談』、『浮城物語』と『新社会』である。

いままで、矢野龍溪の三大作を取り上げた研究はたくさんある。この歴大な研究文章の中で、代表的な論文を挙げると、柳田泉の「『経国美談』とその政治思想」（『政治小説研究・上』1967）と「矢野龍溪の『浮城物語』について」（『政治小説研究・下』1968）、鈴木英夫の「明治前期文語文の語法—「経国美談」前編の異同を中心に」（『国語と国文学』1976）、上笙一郎の「日本児童文学におけるナショナリズムの系譜—「浮城物語」から山中峯太郎へ」（『日本文学』1961）、宮井

<sup>1</sup> 柳田泉 「『経国美談』とその政治理想」（『政治小説研究・上』、1967年）、203頁を参考。

<sup>2</sup> 幸徳秋水 「『新社会』を読む」、1902年7月7日付『萬朝報』3161号を参考。

<sup>3</sup> 野田秋生は丸山真男の『矢野龍溪：資料集 第1巻』の序文を踏まえて、『矢野龍溪』（大分県教育委員会、1999年）の「はじめに」に、「故丸山真男氏は「矢野龍溪とはそもそも何者か」と問われ、その「知」の在りようを「普通人」と表現して、「たこつぼ」型の多い日本近代の知識人の中にあって特異の存在である」と丸山真男の論述をまとめた。

敏の「矢野龍溪の「新社会」—明治近代化過程におけるユートピア思想の意義」(『人文科学』1979)、  
葛木能雄の「明治期社会主義の一考察 : 矢野文雄と『新社会』」(『三田学会雑誌』1993)がある。  
しかし、これらの論文は全部三大作を個別で論じたものであり、矢野龍溪の全体像の視点から、  
総合的に三大作品の継承性を論じたものはほとんどない。拙稿は、今までの先行研究を踏まえて、  
社会環境と矢野龍溪の立場、経歴との変化に留意しながら、作品が表した「空想性の増減」、  
「中心思想の転移」、「個人と国家の優位性変化」及び「武より文、手段より目的への重視」、  
「理想への執着」の側面から、三大作が時間軸における継承性を絞るものであり、矢野龍溪の作品  
研究における新しい試みである。

## 1 三大代表作品の概略

### 1.1 『経国美談』の概略

『経国美談』<sup>4</sup>は1883(明治16)年矢野龍溪がギリシア歴史に基づいて創作した最初の名作であり、  
文学改良意識と改進黨の政治思想が織り込まれた政治小説である。小説は古代ギリシア  
勃興期のテーベを描き、日本の民権と国威の伸張を図り、光彩のある主題、雄大な構造、耳目一  
新させる文体で当時の人々の共鳴をもたらした一方、明治文学史上でも非常に好評された。

『経国美談』の舞台は紀元前382年頃の希腊(ギリシア)北部の民政国家即ち齊武(テーベ)  
である。当時、齊武の人民議会内には民政党(正党)と専制党(奸党)という対立している二つ  
の大きい勢力が存在していた。齊武に住んでいる主人公の巴比陀(ペロピダス)、威波能(エパメ  
イノンダス)、瑪留(メルロー)という三人の青年はそれぞれ「知、仁、勇」に勝れた民政黨員であ  
る。専制党がス波多(スパルタ)兵を後援に政変を起こしたことを契機とし、民政黨員達にとつ  
ての恐怖時代が出現した。専制党による政変発生から四年後、巴比陀が率いた正党の勇士ら12  
人が民政を回復するために、奇計を図って、奸党の巨魁を刺し、後に来た威波能も同志を率いて  
ス波多の戍兵を退け、正党の志士達によって民政は回復された。

後篇は隣国のス波多王亜是刺(アゼシラオス)が大挙して齊武を討伐したのに対して、力を蓄  
えていた齊武は阿善国と連盟して三度とス波多軍を大いに破った。阿善の国運はますます高く  
なり、積極的に国威を伸張しているところに、外交に問題が発生した。連年の戦争のため、ギリ  
シア全土大平和論に賛成する国家が次第に多くなったのである。紀元前371年に、ス波多の首  
都で全ギリシアの大平和会議を行うことになり、ス波多と阿善は秘密裡に諒解をとげ、齊武を  
抑えて、ギリシアの覇権を分割しようとした。これに気づいた齊武は威波能を使節として派遣  
した。しかし、威波能がス波多王亜是刺と正面衝突した時、阿善はス波多の味方で黙視した。後

---

<sup>4</sup> 拙稿「矢野龍溪と『経国美談』について」(『東アジア文化研究科院生論集』7号、269-286頁)に詳しい。この一節は本稿論点の背景知識として、拙稿「矢野龍溪と『経国美談』について」に基づいてまとめたものである。

に斯波多は40万の大軍を挙げて、四度に渡って斉武を征伐した。斉武は戦争を決意し、30万の兵を集め、その中の20万を威波能と巴比陀に与えた。結果的に斯波多は威波能の武略に大敗した。史上、これはレウクトラの戦と呼ばれる。この一戦で斯波多の覇権はなくなり、斉武の覇権的な地位は定められた。

『経国美談』は明治初期自由民権運動の最盛期及び矢野龍溪が改進黨の建設と運営で多忙の最中に誕生され、自由民権の実現、憲政の樹立という政治構想を訴えた色彩が濃厚である。伝統的な読本体歴史小説の形を継承したと見なされる<sup>5</sup>ところがあるが、当時斬新な文学形式の政治小説のジャンルに囲まれているのが紛れもない事実となった。『経国美談』はギリシア古代史に基づく歴史小説といっても単純なる翻訳ではなく完全な創作でもなく、両者の中間に立脚している。また、矢野龍溪が小説に表した自由民権思想は当時の人々の憧れであった。憲法発布、国会開設を目標とし、現実には敢闘してきた当時の青年達は、この『経国美談』に出てくる英豪たちの意気に共鳴しその活躍を礼賛した。この意味で『経国美談』はその時代における青年志士を感化した力が満たされ、政治的な示唆も最初の動機と合い、大成功を収めたと言える。矢野龍溪は『経国美談』の著書印税を洋行費にあたって、政治視察のために欧州外遊を行った<sup>6</sup>。著作料取による外遊を行うのは矢野龍溪が第一号であったという<sup>7</sup>。

一方、『経国美談』は1900(明治33)に『清議報』に連載されることを皮切りに、いろんな単行本が出版された。訳本は中国の当時の社会現状と読者層に応じて添削と置換があるが、自由民権の中心思想は変わらなかった。

## 1.2 『浮城物語』の概略

『浮城物語』<sup>8</sup>は領土拡張、海外雄飛の夢を抱く日本青年志士一行が海王丸、浮城丸に乗って、大洋を航行して東南アジアで小国の独立運動に加える海洋冒険小説である。物語は雄大なスケールと無限の活気に満たされ、当時の青年読者の心を刺激した。

19世紀90年代、欧米国家がアジアに進出し、植民地を開拓する気配が高まり、当時の日本の知識人は欧米侵略の気配を感じ、国家権力の伸張を重視するようになった。『浮城物語』はこのような時代背景の下で出版された。

『浮城物語』の主人公が文人の作良義文と軍人の立花勝武という二人の志士であるが、物語は「余」、つまり上井清太郎の日記を模した「自叙体」の形式で展開される。この「自叙体」による

<sup>5</sup> 加藤周一・前田愛『日本近代思想大系・文体』(岩波書店、1989年)、415頁に詳しい。

<sup>6</sup> 小栗又一『龍溪矢野文雄君伝』(大空社、1993年)、220頁を参考。

<sup>7</sup> 野田秋生『矢野龍溪』(大分県教育委員会、1999年)、114頁を参考。

<sup>8</sup> 拙稿「矢野龍溪と『浮城物語』について」(『東アジア文化研究科院生論集』8号、223-247頁)に詳しい。この一節は本稿論点の背景知識として、拙稿「矢野龍溪と『浮城物語』について」に基づいてまとめたものである。

展開形式は当時においてかなり近代的な手法であった。『浮城物語』は全篇すべて風雲の気をそそる雄渾壮大な気魄に満ち、特にその舞台を南海としていたので、当時の青年たちに凶南の志を沸かせた。簡潔な漢文くずし調の文章で、「大分県豊後国南海部郡、旧佐伯藩領に日向泊なる一漁村あり、昔し神武帝東征の時、龍舟此地に泊せしを以て、日向泊の名あり」という一文よりはじまる。

最初に登場した人物は上井清太郎（「余」）である。上井はこの小説の中で、やや臆病で極めて平凡な人間として描かれている。大分県出身の上井は立身出世のために、東京に行く途中、作良義文と立花勝武という二人の冒険政治家と出会った。物語はここから展開されている。作良義文は東北地方の出身で、政治、経済、科学、文学に通じる30歳前後の紳士であり、立花勝武は薩摩出身の26歳の軍人である。上井はこの二人の海外雄飛の企図に通訳として加わることになった。作良と立花の冒険大業の目標は、「我々今将きさに全地球を蹂躪して無人の地を席捲し日本に幾十倍するの大版図を拓て以て之を陛下に献し我々請て其地を鎮せんとす」とあるように日本の版図を拡大し、その土地を統治することである。三人は連判状に署名した百二十九名の乗員とともに「海王丸」に乗って出航した。その後のストーリーの大筋は以下のとおりである。

1878年3月 「高砂丸」横浜出航

4月 新生「海王丸」出航

5月 海賊艦を奪い、「浮城」と命名

6月 上井と菊川が気球で遭難

7月 オランダ領事の人質と笹野との交換が失敗におわる

オランダ艦5隻との海戦大勝

8月 オランダ軍と戦闘大勝

9月 バタビア政府と和議を締結

バタビア政府と和議を締結した後、青年志士たちは百万円の賠償金で、ヨーロッパの造船会社に新しい船艦一隻を注文し、再びインド洋へ繰り出そうとした。

物語に登場する国権伸張、領土拡張の大事業を追求するキャラクターの設定は、当時の南進論に影響された青年志士の海外雄飛の夢と呼応し、人心を奮い立たせた。物語における架空の海軍と版図、理想化されたキャラクター、想像の新武器と新発明は全部矢野龍溪の空想に基づいた設定である。物語には地理、物理、歴史、化学、医学、天文、軍隊操練、戦争策略、船艦操作、貿易などの近代知識が織り込まれている。

『経国美談』より7年遅く出版されたこの『浮城物語』には、「国権伸張」および「海外雄飛」の願望が込められ、政治思想を鼓吹することを目的として書かれたため、明治初期の政治小説の最後を飾ったということは今日の学术界では認識されている。ただし、出版直後、当時の文学界ではその政治的な意味からというより、小説の本質とは何かという文学論の角度から議論され、

いわゆる「浮城物語論争」が巻き起こった<sup>9</sup>。論争されながら時代の変遷につれて多角度でその価値が検討されてきた。

第二次世界大戦の敗戦によって、日本はアメリカ資本主義に従属するようになり、政治的にも経済的にも文化的にもアメリカの影響を多大に受ける立場となった。日米安保条約を巡るナショナリズムの高揚期と重なり、『浮城物語』は児童読物化され、日本児童文学のジャンルとして新たに検討されるようになった。例えば、上笙一郎は『浮城物語』をナショナリズム児童文学の嚆矢として位置づけた<sup>10</sup>。また、1964年、山田博光はかなりの紙幅を割いて矢野龍溪の『浮城物語』を取り上げて、日本のSF小説いわゆる空想科学小説というジャンルを論じた<sup>11</sup>。そして、1988年剣持武彦は『浮城物語』を「海洋小説」および「軍事ユートピア小説」とみなし、『浮城物語』がそれまでの日本文学になかったジャンルを開拓した意義を持つとした<sup>12</sup>。さらに、2016年長山靖生は『浮城物語』を日本最初のSF小説と位置づけ、近代文学史における先駆性を是認した<sup>13</sup>。そこから『浮城物語』における永遠の若さと力が感じさせられる。

### 1.3 『新社会』の概略

『浮城物語』が出版された12年後、『新社会』<sup>14</sup>が誕生した。『新社会』の誕生は社会主義思想が日本に出現したことに起因する。19世紀、資本主義社会が過酷な労働環境など多くの矛盾を孕んだため、社会主義運動は欧米から巻き起こった。社会主義に興味を持つ矢野龍溪は1902年

---

<sup>9</sup> 1889(明治22)年の「文学極衰」論争の翌年、『浮城物語』が出版され、その序文で徳富蘇峰は、当時の文学界の状況について認識を論じた上で、「所謂十九世紀の実学を架空文学の中に寓したる者にして、之を評して、一種第十九世紀の水滸傳と云ふ、亦不可なる可し」と、『浮城物語』の雄大なスケールを高く評価する。これに対して、当時の新進の批評家である石橋忍月は、「著者は第一に趣向を求めて戦争、冒険、煙等之に次ぎ、而して人物の感念は措いて問わざるもの如し」と、内田魯庵は、「『浮城物語』何の爲めに出でたるや。若し龍溪居士が胸中に鬱積する不平を洩すに過ぎざれば、是れ政治家の玄関番が作りし所謂佳人才子的の政治小説と同様にして審美学上論評するの価値なし」と厳しく批判した。のちに矢野龍溪は「浮城物語立案の始末」(『郵便報知新聞』、1890年6月28日-7月1日)に「読者に娯楽を興えるは小説の生産物なり、世を矯め俗を激し、人を戒め時を諷するは是れ小説の副産物なり」と石橋忍月と内田魯庵の論説を反論した。

<sup>10</sup> 上笙一郎「日本児童文学におけるナショナリズムの系譜—『浮城物語』から山中峯太郎」(『日本文学』第10巻第9号、1961年10月)に詳しい。

<sup>11</sup> 山田博光「明治期の未来小説議論」(佐藤喜一郎編『橋本佳先生還暦記念文集』所収、1964年5月)に詳しい。

<sup>12</sup> 剣持武彦「矢野龍溪『浮城物語』論」(『上智大学国文学科紀要』5、1988年1月)に詳しい。

<sup>13</sup> 長山靖生の「『浮城物語』をめぐる：政治小説の終わりと近代文学のはじまり」(『SFマガジン』2016)に詳しい。

<sup>14</sup> 拙稿「社会主義者の矢野龍溪—『新社会』を中心に」(『東アジア文化研究科院生論集』6号、221-236頁)に詳しい。この一節は本稿論点の背景知識として、拙稿「社会主義者の矢野龍溪—『新社会』を中心に」に基づいてまとめたものである。

に菊版 292 頁の『新社会』を著作した。『新社会』は出版してから半年以内に 17 回再版された。当時は日本人が書いた初めてのオリジナルユートピア書作として<sup>15</sup>幸徳秋水、片山潜など有名な日本の初期の社会主義者を含め、人々の注目を集めた。

『新社会』は小説風を採って、「旧社会」から来た金尾徳太郎と田美野悦蔵と名乗る二人の紳士は偶々「新社会」に到着して、新社会の公園で当地のある一老紳士と出会った。二人は新社会の状況を聞き、老者はこれに回答するという問答形式で展開される。老者は描いた「新社会」は、「生れて教育を得ざるものなく、老ひて其養を得ざるものなく、衣食を求めて得ざるものなく、病んで医薬を得ざるものなく、訴訟なく、犯罪なく、人々相知し、相愛して、真とに太平の象」のようなユートピア社会である。

『新社会』は工業、商業、農業、政治、法律、教育、金融、貿易、文化、芸術、娯楽、慈善、一国を超える世界の平和などに触れ、さらに社会主義の現実と合わせた実現方法を示し、総合性の持つ理想ユートピア論である。『新社会』は当時の社会主義者にも広く読まれ、政府に弾圧されている社会主義者に大きな自信を与えた。また、『新社会』はモアアの『ユートピア』からもらったヒントがあると考えられるが、翻訳の作品ではなく、小栗又一が『龍溪矢野文雄君伝』（春陽堂、1931 年）に述べたように、「建設的社会主義思想も盛る最も着実な文献であり」、「日本における社会主義文献の鼻祖」であると位置付けられると言っても過言ではない。しかし、著作には社会主義思想の不徹底性も見られるためマイナスな評判を見つける事も難しくはない。

『経国美談』と『浮城物語』と比べて、もともと経済論文<sup>16</sup>として発表するつもりだった『新社会』は形式的に小説として構成されていたが、内容的にはストーリーが少なく、文辞的に優雅さに欠ける傾向が見られ、文学史の視点からアプローチする意義が少ないと考えられる。

## 2 三大作の時間軸における変化

この三つの作品はそれぞれ矢野龍溪が三十代、四十代、五十代に作成した作品である。時代変遷と作者の個人体験の変化にしたがって、作品自体の変化と不変となるところに興味が惹かれる。次は時間軸における変化となるところに関して四つのポイントを取り上げて論じる。

其の一、『経国美談』は民権拡張のイデオロギーに満たされ、明治十年代の自由民権運動と繋がっている作品として受けられていた。斉武の奸党が国家の政権を握った後、英雄達の奮闘地であった阿善では人民は参政権があり、議員は選挙によって選出され、政治を論じることは人民の娯楽とされている。このような政体形態は自由民権運動を主導した改進黨領袖の矢野龍溪が自分の政治理念を作品によってそのまま具現化したものである。『浮城物語』の場合、明治二十年代の国権拡張思想とナショナリズムの系譜の作品として受けとめられている。この地球に

<sup>15</sup> 蔦木能雄「明治期社会主義の一考察—矢野文雄と『新社会』」（『三田学会雑誌』86 卷 2 号）、122 頁を参考。

<sup>16</sup> 大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻（大分県教育委員会、1997 年）、375 頁を参考。

生まれた以上地球を横行する自由があり、日本に生まれたからといって日本だけで働かなければならないわけではなく、吾々はこの地球に生まれ、全地球を舞台として稀世の大業を為すべきだと豪語した作良義文は、日本血性男児の一団とともに国家の前途即ち領土の拡張のために南洋に進出した。このようなプロット設定は侵略意欲をますます呈した先進国への警戒心、先進国の勢力団体に加入する奮起精神あるいは欧米列強の条約改正を背景にした矢野龍溪の国権思想を具現化したものである。また、『新社会』は明治三十年代の作品である。当時経済状況の停滞と民主的自由の欠如などが原因で、社会矛盾が激化し、社会問題が発生し、その解決方法を巡って、各種の結社が誕生した。その中に、社会主義の理想を掲げた団体や政党などの結社は主体的に展開された。『新社会』における新たな社会は個人資産を買い上げ国有化し、随意競争を制限し、分配を平均化する各種の仕組みが実施されている。すなわち、この三大作の主線をまとめると、『経国美談』の自由民権の思想は欧米列強の膨張する侵略意欲と植民地開拓の脅威によって『浮城物語』の国権思想に変化した。この国権思想はまた資本主義制度の定着に伴って、社会発展のバランスが崩れとアジアにおける列強権利の膨張と戦争気配の高まりによって、『新社会』の社会主義思想と世界大平和思想に変質したのである。

其の二、『経国美談』から『新社会』に至るまで、作品の現実指向性は弱くなり、空想性は強くなる傾向が見られる。『経国美談』の「自序」には、「予ノ意、本ト正史ヲ記スルニ在ルガ故ニ、尋常小説ノ如ク擅ニ事実ヲ変更シ、正邪善悪ヲ転倒スルガ如キコトヲ為サズ」<sup>17</sup>と書かれ、「凡例」には「此書は希腊ノ正史ニ著名ナル事実ヲ、諸書ヨリ訳シテ組立テタルモノニテ、其ノ大体骨子ハ全て正史ナリ」<sup>18</sup>と繰り返して「事実・正史」を強調し、篇中の至るところに出典を明示していることから矢野龍溪は現実に準じ、物語の実事性を重視していることがわかる。作者の想像で潤色を施し、缺漏を補述したところも散在しているが、現実と甚だ離れて、論理的に存在が不可能な模糊の雲烟を表現することは遠慮されている。つまり、正史を記す上で作者の想像に制限が生じたのである。しかし、『浮城物語』になるとその「緒言」に「去歳明治廿二年外国郵便を以て伯父某の許に一函の書を送致す、某既に死して数年なり、其書傳へて社員の手に至る、之を読むに清太郎自家身上の経歴史にして其事絶快、人をして魂飛び神遊はしむ。宛然一個の好小説なり、乃ち繁を刈り冗を去て更に修飾を加へ題して浮城物語と云ふ」<sup>19</sup>と述べられているように、『浮城物語』は数年前に死んだ「某」の「一函の書」を準じて脚色した「経歴史」、すなわち上井清太郎の「日記」であることがわかる。このような設定によって、ある程度現実の世界を脱出することに制限が生じるが、既に死んだ名も明示されていない人の経歴であるため、一定の想像力を駆使することができる。作者の想像力を運用するにはかなりいい都合の設定だと考えられる。

<sup>17</sup> 矢野龍溪『経国美談』(岩波書店、1975年)、自序。

<sup>18</sup> 矢野龍溪『経国美談』(岩波書店、1975年)、凡例。

<sup>19</sup> 矢野龍溪『浮城物語』(報知社、1890年)、「緒言」。

文中からも風雲の気をそそる雄渾壮大な気魄に満ちた海戦や新式兵器の試練など、作者の想像力はかなり発揮されたことがうかがえる。『新社会』になると、「生れて教育を得ざるものなく、老ひて其養を得ざるものなく、衣食を求めて得ざるものなく、病んで医薬を得ざるものなく、訴訟なく、犯罪なく、人々相知し、相愛して、真とに太平の象」があるという至善至美のユートピア社会は、結局のところある人の夢であった<sup>20</sup>。『新社会』における新社会は日本の実情に基づいて漸進的に建設可能な新しい社会であり、全く痛みや不幸がなく完全なユートピア社会である。作者の想像力もここで夢に仮託し、悉く完璧で具現化されたと言っても過言ではない。

このような変化の原因は1902（明治35）年まで明治の新しい国家体制、運営規制の大筋が定まり、現実社会を指向して民権確立、憲法国会確立のような早急に解決しなければならない『経国美談』時期の問題がなくなったことにある。一方、矢野龍溪が起草に参加した交詢社憲法は政府で議論されず、二回引退した矢野龍溪の官途が決して順調ではなかったことにも起因すると考えられる。そして、日本社会、日本人民にずっと希望を持ちつつある矢野龍溪は常に元来最善の社会組織はどうあるべきかを思索し、現在の社会の欠陥と改善方法を研究し、社会改良への関心を強く持っていた。それで、政界で志業を実現しなかった矢野龍溪は二十世紀の最初に明治政府の主流権力に違反した社会主義に身を転じ、空想のユートピア社会を描き、元来の理想の社会模様を小説に仮託した。『新社会』における夢は矢野龍溪が当時の社会現状への反措定であり、矢野龍溪の内面にあるユートピアだと考えられる。

其の三、この主線に沿った三大作からは国家に対する個人の優位性の増加傾向が見られる。『経国美談』の場合、斉武民政回復大業を実現させた人物は巴比陀、威波能、瑪留らの「英雄志士」である。キャラクターは優れた能力と高邁な精神を持っている英雄豪傑ばかりで、直接国家の歴史を書き直す事業に参加する平凡な人民がいないということから、作品は英雄崇拜思想から脱出していなかった。そして、「愛国心ナク一個人タル国民ノ義務ヲ尽サザル者」と書かれたように愛国心を国民の義務として見なされていた。『浮城物語』になると、領土拡張の大業を主導した人が作良義文と立花勝武であるが、その他に参加する人は百人以上になり、鉄匠から裁縫まで全ての人は役目を持っていた。『新社会』に至るまで、大事業は元々描写していないが、作品に登場した人物は全て極めて平凡な人民であり、上下関係、制約と被制約関係などの階級区分も弱くなっている。『新社会』の出版後、1903年12月3日に公表された矢野龍溪の「社会主義の経済」<sup>21</sup>においては「国の富の多いことよりも各個人の貧しからぬ事、一国の表面上の繁栄よりも各個人の幸福なる事を望みます」と述べられ、個人の幸福、所謂個人の利益を優先位に置くという作者の転変がうかがえる。以上のことから、矢野龍溪はこの二十年間にわたって、国家権

<sup>20</sup> 『新社会』は「いのちにもまさりて惜くあるものは、見果てぬ夢のさむるなりけり」の一文で結んだことから分かる。

<sup>21</sup> 矢野龍溪「社会主義の経済」は最初に『社会主義』（7巻25号）に掲載され、1887年『矢野龍溪資料集』第四巻に収録されている。



利伸張、国権献身の覚悟から、個人と国家の調和を求める姿勢に転じたのである。

其の四、柳田泉は「矢野龍溪の『浮城物語』について」の文頭に、「私は、『浮城』がその出現の意義及び読者への感化の点で、決して『経国美談』と甚しい径庭がなかったものと信ずる」と発言した<sup>22</sup>。しかし、文学史における意義においても影響範囲においても、『新社会』は『浮城物語』に及ばず、『浮城物語』は『経国美談』に及ばないと考えられる。中村暢時の「矢野龍溪の文体」<sup>23</sup>は三大作の文体文辞面での変化を詳しくまとめているので参考になると考える。中村氏の論述を要約すると次のようになる。『経国美談』は情景や場面に応じて、和漢混交文体、七五調読本体、擬古文体を使い、かなり工夫を凝らしおり、矢野龍溪の新文体を創作する意欲が一番感じられる作品である。しかし、『浮城物語』の作成期に言文一致運動がすでに一定の成果をあげていたが、『浮城物語』の文体からは漢文訓読体的な文体の名残があり、一種の古さが感じさせられる。

一方、プロットの構造に関して、『経国美談』は照応、付線、抑揚の手法を利用し、読者に手に汗を握らせる緊張感を与え、ストーリーとして盛り上げているところから作者の工夫がうかがえる。『浮城物語』の興味が舞台設定の雄渾にあり、『経国美談』と同じ効果を作り上げているが、『経国美談』のほうが作者の考案がもつといると考えられる。『新社会』はプロットの構造が元々なく、文学史的な意義がほとんどなく、従来の研究もほぼ全部思想史の側面からアプローチしている。そして、『経国美談』が出版された後、ほぼ批判がなく、積極的な評価が主であった。『浮城物語』が出版された後、直ちに「浮城物語論争」がもたらされ、批判者の中に内田魯庵と石橋忍月は其の代表であった。特に石橋忍月は「本篇は経国美談と比較せば格別の拙作なり」<sup>24</sup>と公言した。『新社会』は私有資本と立憲帝政の保留を認め、社会主義思想の不徹底性があるため、社会主義思想史上にも明治文学史にも名前が残されていなかった状況にある。

### 3 三大作の時間軸における不変な特徴

三大作は時間軸における変化が見られるが、時代の流れにつれて不変な特徴もいくつか指摘できる。たとえば、小説を通して政治理念を伝えるのはいうまでもなく、そのほかにも三つの特徴を指摘すべきである。

まず、『経国美談』の登場した主人公は巴比陀、威波能、瑪留の三人である。この三人はそれぞれ「智仁勇」の三徳を代表しているとされている。勇を代表している瑪留は役目が巴比陀と威波能より少ないのはいうまでもない。威波能は巴比陀よりもっと「良心」があり、「原則」がある正々堂々行動するキャラクターであり、獄中に居る時でも、「理学ヲ修ム」知識人であるように設定されている。智の代表者巴比陀は阿善に逃亡した後でも、当地の名所旧跡を見学し、神話伝

<sup>22</sup> 柳田泉「矢野龍溪の『浮城物語』について」(『政治小説研究・下』、1968年)、152頁に詳しい。

<sup>23</sup> 中村暢時「矢野龍溪の文体」(『文学史研究』、1972年)を参考。

<sup>24</sup> 1890年4月3日付『国民之友』(『明治文学全集』15)、388頁に収録。

説を調べた。これは藤田鳴鶴が『経国美談』初版に寄せた頭注「表明英雄為読書人」そのものである<sup>25</sup>。また、巴比陀が歌った「春の歌」は、忍耐を暗示し、理性と知的に満たされ、中国語に翻訳された時、「春の歌」と全く関係のない「武力」に満たされる「短剣行」に変身した<sup>26</sup>。そこからも作者は「武」より「文」を重視している姿勢がうかがえる。そして、『浮城物語』には戦争の場面が多いが、決して武力を吹聴する作品ではない。作良義文と立花勝武はそれぞれ文と武の代表である。軍艦陣容の役割表には、「第一、大統領」は作良であり、「第二、海陸兵事総理」は立花であった。官位の高下から「文」を代表する作良の優位性がうかがえる。篇中には勇敢な立花の「武」はいつも「作良」の「文」に制御されている点においても同じように、「文」の優位性は明らかである。さらに、『新社会』になると、文武を代表しているキャラクターがないが、社会の仕組みは農業、工業、商業、法律、教育、通貨などであり、軍事機能を担う機関がなかった。特に、農工商の三省の中で、創案局が最も重要視されていることから、矢野龍溪は「知識人」に対する重視がうかがえる。以上のように三大作は「武」に対する「文」の優位性がよくうかがえる。「文」を重視するのは知的な矢野龍溪の一貫した意識である。たとえば、矢野龍溪が運営した立憲改進黨は穏健なイギリス流議政治を主張したことや<sup>27</sup>、駐清公使任期中に日清戦争賠償金の回収と留学生派遣問題を清政府と交渉する時、矢野龍溪は清国文化に尊重を表すことを糸口にして柔軟な外交手段を取ったことからみれば<sup>28</sup>、作者矢野龍溪はあくまでも文人流儀である。

また、三大作に具現されたのは例外なく全部矢野龍溪の想像力で創造された理想的な「別天地」である。『経国美談』の序には「世人動モスレハ輒チ曰フ稗史小説モ亦世道ニ補ヒアリト。蓋シ過言ノミ。若シ夫レ真理正道ヲ説ク者世間自ラ其書アリ。何ソ稗史小説ヲ假ルヲ用キ。唯身自ラ遭ヒ易カラサルノ別天地ヲ作為シ卷ヲ開クノ人ヲシテ苦楽ノ夢境ニ遊ハシムルモノ是レ則チ稗史小説ノ本色ノミ」<sup>29</sup>と叙述されたように、稗史小説の本色は人に別天地を作ることとされている。この「別天地」における諸名士、特に巴比陀、威波能は理想的政治家として描かれた。また、篇中の第25回の題目「縦横計成テ覇業定マル、内政治ル後チ国威振フ」は立憲改進黨趣意書の第2条の「内治の改良を主とし、国権の拡張に及ぼす事」<sup>30</sup>と一致することと同じように、『経国美談』には改進黨の重要な組織者である矢野龍溪の政治理想が内包されていると考えられる。

<sup>25</sup> 小川武敏「『経国美談』の構造一想実論の前段階として」(『文芸研究』第41号)、13頁を参考。

<sup>26</sup> 若杉邦子「『経国美談』論一政治小説の“伝播”に伴う変容について」(『文化学年報』3号)に詳しい。

<sup>27</sup> 拙稿「矢野龍溪の政治活動-明治14年政変後」(『東アジア文化交渉研究』11号、395-412頁)に詳しい。

<sup>28</sup> 拙稿「矢野龍溪の西洋と東洋に対する認識の一考察」(『東アジア文化交渉研究』10号、637-655頁)に詳しい。

<sup>29</sup> 矢野龍溪『経国美談』(岩波書店、1975年)、自序。

<sup>30</sup> 1882(明治15)年3月14日付けの『郵便報知新聞』に掲載されている。

『浮城物語』の場合は『経国美談』の「別天地」を受け継いで、新聞紙に小説の「別天地」を作り上げた。作良一行は国籍までを放棄して理想世界を築き上げようとした。矢野龍溪は作良の行為を通して日本血性男子の自我意識を表し、作良の演説を通して日本の海外雄飛の構想を描き、作良の身を借りて自分の夢を世に訴えた。「浮城丸」における運命共同体的の結束力、文と武の調和された指導力、新兵器で形成した戦闘力は矢野龍溪が願っている当時の日本の有すべきな「力」ではないだろうか。『新社会』に築き上げられた新たな社会は「生れて教育を得ざるものなく、老ひて其養を得ざるものなく、衣食を求めて得ざるものなく、病んで医薬を得ざるものなく、訴訟なく、犯罪なく、人々相知し、相愛して」いる社会であり、矢野龍溪の理想中の「最善最良」の社会である。このような社会は最後に指摘されたように、結局「残夢」であった。この「残夢」は日本ないし日本国民への夢であり、人類社会の幸福を訴える夢でもあった。

そして、『経国美談』の序には「故ニ稗史小説ノ世ニ於ケルハ音楽書画ノ諸美術ト一般、尋常遊戯ノ具ニ過キサルノミ。是書ヲ読ム者亦タ之ヲ遊戯具ヲモテ視ル可キナリ。唯其大体骨子ハ則チ正史實蹟ナルヲ記センノミ」<sup>31</sup>と小説はただ遊戯の道具に過ぎないと述べられた。これは当時の文壇小説家の普遍的な価値観と対立されている。当時は『小説神髓』の影響がまだ随分あり、人情世態を小説の本質とされている。小説はあくまでも道具であり、小説の目的は読者に娯楽を提供することにあるという矢野龍溪の考え方は自分流儀であると言えよう。矢野龍溪は文学だけに視線を投じるのではなく、文学から身を抜け出し、社会の多方面を眺める余裕を持っているからこそ、小説を道具として取り扱う気魄があったであろう。一方、矢野龍溪のこの認識は『浮城物語』にも延長されている。「浮城物語立案の始末」<sup>32</sup>には「予は彼の有名なる文学家ワルテル・スコット氏が小説は「不善ならぬ娯楽を世人に与ふるものなり」との語を以て当れりとせん。事実を其儘に記載すれば、小説に非ず、歴史なり。風教を主として娯楽を与へざれば、小説に非ず道徳書なり。世にあり得べき事柄を湊合して、世に有ることなき物語を組立て、世人に娯楽を与ふるもの、是れ小説の本色のみ」と述べられているように、矢野龍溪は世人に娯楽を与えることを小説の第一の目的としている。これはいわゆる矢野龍溪のいっている小説の「生産物」<sup>33</sup>である。この目的意識と娯楽精神はさらに『新社会』にも継承されている。矢野龍溪は『新社会』に人民均一の幸福を一番重んじ、社会主義者でありながら私業と帝政を認めた。また、美術、書画から、彫刻、音楽、演劇、軽業、手品まで、いずれも公費で楽しめる新社会は娯楽生活の健全で、社会一般に和気が溢れ、人気が悠雍温和であった。そこから、作者は手段に拘らなく批判されることでも断行する目的意識がうかがえる。小説でも政治制度でも唯手段であり、矢野龍溪は不変に追求しているのは人民の幸福である。これは自由民権を主張する『経国美談』、

<sup>31</sup> 矢野龍溪『経国美談』（岩波書店、1975年）、自序。

<sup>32</sup> 矢野龍溪「浮城物語立案の始末」（『郵便報知新聞』、1890年6月28-7月1日）を参考。

<sup>33</sup> 矢野龍溪は「浮城物語立案の始末」に、「読者に娯楽を興えるは小説の生産物なり、世を矯め俗を激し、人を戒め時を諷するは是れ小説の副産物なり」と説いた。

国権伸張を訴える『浮城物語』と社会主義を宣伝する『新社会』の三大作における矢野龍溪の不变な思想源流ではないであろうかと考えられる。

### おわりに

国家体制の整えと矢野龍家が現実世界に遭った衝撃<sup>34</sup>の増えにつれて、三大作の現実社会への指向性は弱くなり、空想性は強くなる傾向が見られる。そして、世界局勢と国家主題の変化に伴い、自由民権運動の高揚時期に誕生した『経国美談』の自由民権思想は、欧米列強の膨大な脅威によって『浮城物語』の国権思想に変化した後、社会発展のバランスが崩れと戦争気配の高まりによって『新社会』の社会主義思想と世界大平和思想に変質したのである。また、国家権利伸張、国権献身の覚悟から個人と国家の調和を求める姿勢に転じた矢野龍溪が創作した三大作からは国家に対する個人の優位性の増加傾向が見られる。

一方、三大作品は時代の変遷にも関わらず、終始一貫して、「民」、「国」及び「国際」を取り扱う対象とし、小説を通して政治理念を伝える共通点は明らかであり、創作内容と舞台がそれぞれだが、いずれも具現されたのは矢野龍溪の想像力で創造された理想的な「別天地」である。それぞれ政治小説、SF小説、オリジナル社会主義作品のジャンルに「嚆矢」に位置づけられ、強い時代性を持ち、作者の経歴と深い関連性のある三大作品は出版時間が二十年間ほど渡っているが、時間軸において、特徴づけられる継承性と変容性が現されている。作者矢野龍溪は「武」に対する「文」を重視し、時代の波に終始して手段に拘らず、強い目的意識を持ち、自由民権、独立自主、幸福安定への追求という強固な中心点を軸としていたのである。

### 参考文献

#### 一 書籍

- 矢野龍溪『新社会』第16版（大日本圖書株式会社、1902年）  
矢野龍溪著・高垣眸訳『浮城物語：現代語版』（金星堂、1943年）  
越智治雄編『論集「文学史」第一輯・近代文学の検討』（白帝社、1962年）  
越智治雄編『日本近代文学大系2・明治政治小説集』（角川書店、1974年）  
矢野龍溪『経国美談』（岩波書店、1975年）  
米田貞一『矢野龍溪』（大分県教育委員会、1977年）  
小栗又一『龍溪矢野文雄君伝』（大空社、1993年）  
野田秋生『矢野龍溪』（大分県教育委員会、1999年）

#### 二 論文

---

<sup>34</sup> 矢野龍溪は1881（明治14）年に起草に参加した「交詢社憲法案」が政府に議論されず、「明治14年政変」により下野になり、1889（明治22）年に支持してきた大隈重信が投げつけられた爆弾で重傷になった二ヶ月後何度も政界引退の意図を表明した。

矢野龍溪「浮城物語立案の始末」(『郵便報知新聞』、1890年6月28-7月1日)

内田魯庵「『浮城物語』を読む」(『国民新聞』、1890年5月8・16・23日)

幸徳秋水「『新社会』を読む」(『萬朝報』3161号、1902年7月7日)

上笙一郎「日本児童文学におけるナショナリズムの系譜—「浮城物語」から山中峯太郎へ」  
(『日本文学』10、1961年10月)

柳田泉「『経国美談』とその政治理想」(『政治小説研究・上』、1967年)

柳田泉「矢野龍溪の『浮城物語』について」(『政治小説研究・下』、1968年)

小川武敏「『経国美談』の構造—想実論の前段階として」(『文芸研究』第41号、1979年3月)

藪禎子「『経国美談』論」(『国語国文研究』第65号、1981年2月)

剣持武彦「野龍溪「浮城物語」論」(『上智大学国文学科紀要』5、1988年1月)

野田秋生「矢野龍溪『新社会』についての走り書き」(『航跡』11号、1991年11月)

若杉邦子「『経国美談』論—政治小説の“伝播”に伴う変容について」(『九州中国学会報』第31巻、1993年5月)

蔦木能雄「明治期社会主義の一考察—矢野文雄と『新社会』」(『三田学会雑誌』86巻2号、1993年7月)

表世晚「明治社会思想と矢野龍溪の文学」(神戸大学大学院文化科学研究科文化構造博士専攻博士学位論文、2001年)

高橋修「冒険小説の政治学—『報知異聞浮城物語』の世界像」(『岩波講座文学10・政治への挑戦』、2003年)

寇振鋒「『新中国未来記』における「志人」と「佳人」—『経国美談』『佳人之奇遇』からの受容を中心に」(『多元文化』4、2004年3月)

### 三 新聞

『清議報』(復刻版・1970年、中華書局)

『萬朝報』(復刻版・1983-1993、萬朝報刊行会)

『郵便報知新聞』(復刻版・1989-1993、柏書房)

## 『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで）。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

## 『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000字（400字詰め原稿用紙40枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windowsは、微軟PINYIN2.0（簡体字）、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』、大阪：しずみ書房、2000年10-20頁  
 Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」、『或問』第1号、2000年2-15頁  
 Fryer, John. "Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity." *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎（2000:2-15）のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000bのように区別する。

内田慶市 (u\_keiichi@mac.com)  
 沈 国威 (shkky@kansai-u.ac.jp)